

国立音楽院認定 音楽療法士

国立音楽院の認定資格で、音楽の力を活かして障がい児（者）や高齢者の心をケアするための知識や技術を証明。障がい児（者）の社会参加の高まりを受け、そのニーズは高まりつつある。看護や介護、保育の仕事に携わっている人が、現場で活かすために取得をめざすケースも多い。資格取得後は、フリーランスの音楽療法士として独立する道も。

ニュース
&
TOPICS

どう学ぶ?

心理学などの座学や施設実習で実践的なスキルを身につける

国立音楽院音楽療法学科のカリキュラムは2年。心理学や医学の知識を身につけると同時に、高齢者施設や障がい児（者）施設での実習を通じて、さまざまな現場や一人ひとりに応じた音楽療法のスキルを身につける。1年で学ぶ専門部もあり。

どう稼ぐ?

医療や福祉の現場で活躍できフリーランスという選択も可能

主な活躍の場は、病院や老人ホーム、障がい児（者）施設など。フリーランスの音楽療法士として働く道もある。また、看護師や介護士、保育士のキャリアアップとしても活用できる資格なので、「二足のわらじ」で稼ぐことも可能。

沢登紀子さん（45歳）



音楽大学を卒業後、ピアノ講師の道へ。国立音楽院に通い、34歳で資格を取得する。現在はプライベートレッスンのほか、障がい児施設でも活躍中。

音楽を使って福祉や介護の現場で活躍できるスキルを証明。障がい児（者）や高齢者のお役に立つことができる資格です

ピアノ講師としてぶつかった壁が、この世界へ導いてくれた

「私には、この子を教えることができない」。沢登さんが音楽療法士の資格を知るきっかけは、意外なところから訪れた。ピアノ講師として働いていた、20代後半の頃のことだ。「ピアノを弾く以前に、イスにじっと座っていることができない子がいたんです。そんな子どもとどう向き合っていけばいいのかを模索するうちに、音楽療法に行き着きました」。そして、音楽療法士の資格取得をめざして、国立音楽院に入学。ところが入学当初は、戸惑いも多かった。「音楽の役割が、まったく違うんです。教えるために弾くピアノ講師と違って、音楽療法士は心を開くために弾く。壁に向かって手を叩き続けている子どもがいたら、その動きに合わせて音をつけ、「コミュニケーションを図っていくんです」。

「始める人がたくさんいました」自分らしさを表現するツールのひとつとして、音楽を活用してほしい

現在、さまざまな発達障がいをもつ子どもたちに音楽療法を行っている沢登さん。資格取得後「音楽の力を目の当たりにする機会が増えたという」。「動きがぎこちなくて不器用な子にバチを持たせ、太鼓を叩く楽しさを教えます。すると、いい音を出したいという欲求がわいてきて、バチの持ち方が少しずつ変わってくる。指先はまだ神経を配れるようになってきたら、次はピアノの鍵盤に触れる練習を始めて…。そうやって、地道

「音楽の力」を目の当たりにして、やりがいが大きくアップ。音楽に対する自分の引き出しも、たくさん増やすことができました。



「手を叩いたら体の動きを止める」といったように、音を使って子どもと意思疎通を図る沢登さん。この仕事は正解がないところが難しくもあり、面白いところだという。

主催団体

国立音楽院

受験資格

国立音楽院の所定コースを学び、カリキュラムを修了すると資格が取得できる

目安となる取得期間

1年～2年